一つの伝記論 (2)

安達肆郎

目次

序
一
二
三　利用された伝記
四　好事家的伝記
五　文学的伝記

（以上前々号）
（以上本号）

二

前章でみた様に、私の伝記研究の「第一段階」の第一着手は、前述の様な全体の構想の中で、先ず、「本来の伝記乃至はそれにちかい伝記」の実例をみつけ出す為に、世に行われている各種の伝記の実例について、筆者がそれを書く原動力となったと見えるものを取り上げ、それを分析して、その中に「主人公に対する伝記者独得の関心」といえる様な関心が含まれているか否かを検討することである。（小論第一章7節及び第七章参照）

前章で、私の伝記研究が特殊な新しい分野の研究であることを示したが、右述したそれの「第一着手」にとりかかるに先立って、もう一つ、その「特殊な新しい分野の研究」が、ただ特殊な新しい分野の研究というに止まらず伝記論上どの様な意義をもつのか、乃至はもち得るのかを、――具体的に、それの「第一段階の研究」、なかんずく右の「第一着手」の手続きに即して（後述を先取りして）省みておこう。

さて、私の知る限りでは、従来、右の私の伝記研究の様に「主人公に対する伝記者独得の関心」の存在が探求されたことはない。いわんや、それの内容、性格等が問題とされ、探究されたことはない。一般に、「主人公に対する伝記

者独得の関心」に関する研究は、従来の伝記研究が未開のままに残して来た領域である。[1]

然し、「伝記」が人間の生活（生き方）と深い独得のかかわりをもってきたこと（前章参照）を思うと、従来の伝記研究のこの様な状態を、このまま放置してよいはずがない。「主人公に対する伝記者独得の関心」こそが、「伝記」と人間の生活（生き方）との独得のかかわりの核心をなすはずだからである（後述参照）。

してみると、「主人公に対する伝記者独得の関心」に関する研究は、「伝記論」が当然なす可くして、しかも、従来は未開のままに残してきた領域といわねばならぬ。問題は然し、この未開の領域を如何にして開拓するかである。

さて、「主人公に対する伝記者独得の関心」の存在は、普通の伝記の一般の読者には殆ど気付かれていない。伝記を書く際、筆者は主人公に対して何等かの関心を寄せているに違いないが、その関心は、普通の伝記では、筆者が伝記を書く以前からの立場や目的等に基づく関心であって、注意していても、それ以外に、伝記の筆者である為に筆者が特別にいだく関心（伝記者独得の関心）が存在する様には見えないのが普通である。

然し、普通の伝記の一般の読者に気付かれていないということが、直ちに、その様な「伝記者独得の関心」が存在しない、ということではない。一見、存在する様にみえずとも、伝記の筆者のいろいろの関心の中に、「伝記者独得の関心」が主たる関心の一つとして混っていたり、或いは、諸種の関心の陰に潜んでいるかも知れないではないかー。また、稀には「主人公に対する伝記者独得の関心」がもっと表立って、主たる関心としてはっきりみられる伝記が存在するかも知れないではないかー。してみると、伝記研究者は、世に行われている様々の伝記について、右の二点を検討し確認することなしに、「主人公に対する伝記者独得の関心」の存在を独断的に肯定も否定もしてはならないであろう。[2] 結局右の二点の「検討」「確認」の作業は、従来の伝記研究の未開の領域（「主人公に対する伝記者独得の関心」に関する研究）を開拓する為に研究者が先ずなさねばならぬ不可欠の第一歩（第一着手）である。

さて、右の「検討」の結果、もし、「主人公に対する伝記者独得の関心」といえる様な関心が存在することが、そして、その「関心」の在りかが、即ち、その様な「関心」を含んだ伝記の実例が確認されたら、研究者は、更にすすんで、その実例について、「関心」の内容、性格を探究し解明せねばならぬ。それが、「未開の領域」を開拓する為に研究者がなさねばならぬ第二歩である。（この「第二歩」が「第一段階の研究」の後半をなす。）

というのは、私の見通しでは、「主人公に対する伝記者独得の関心」の内容、性格を明らかにすることが、やがて、(1)伝記に関する基本的問い即ち「そもそも伝記は本来人間精神から如何にして（如何なるこころから、いか様にして）生れて来たか」、という問いに対する回答につながり（後述）、ひいては、(2)「伝記は本来人間の生活（生き方）に対してどの様な意義をもつか、またその原因如何」という問いに対する回答にもつながるからである。

右の様に解してよければ、結局、私の「特殊な新しい分野の伝記研究」は、ただ特殊な新しい分野の研究というだけでなくて、伝記論上不可欠の研究で、従来の伝記論がなす可くして、しかも未開のままに残して来た領域の研究である。

そして、前述したその「第一着手」（世に行われている諸種の伝記について、そこに主人公に対する伝記者独得の関心が存在するか否かを検討し、確認すること）は、その「未開の領域」を新たに開拓する為に不可欠の第一歩である。要するに伝記論上不可欠の研究の不可欠の第一歩である。

なお附言すると、右述の「第一着手（「検討」「確認」の手続き―前述）」を、小論で実際には、a．先ず世に行われている諸種の伝記を、形式上外見上、筆者がそれを書く原動力となったと見えるものの大体の性格によって分類[3]し、b．分類した各種類の伝記の典型的実例について行うことは、先述（第一章3節）した通りである。（その様な手続きをとった理由もその際詳述した。）

以下、章を改めてその「第一着手（「検討」「確認」）」に入る。

三

先ず、形式上・外見上「利用された伝記」と呼ぶべき一群の伝記がある。既に書かれた伝記を後になって特定の目的に利用する場合もあるが、ここで取り上げるのは、始めから何かの目的に利用する為に書かれた伝記である。無論、伝記をその為に利用する目的はいろいろであるが、目的は何であれ、これらの伝記は、われわれの問題に関しては、みな同類とみなしうるので、これらを一括して「利用された伝記」と呼ぶことにする。次に若干の実例をあげる。

1

(a) プルタルコスのいわゆる『英雄伝』は、それの特異な形式の故に、『対比列伝 (Bioi Paralleloi)』とよばれることがある。即ち、『英雄伝』は、全部で22組の伝記から成るが、各組の内容は、ギリシア人一人とローマ人一人の伝記を続けて述べ(列記し)、ついで、両者を対比して終る。(1)

さて、プルタルコスは、この伝記を歴史と区別して次の様にいう。「私が書くのは歴史の本ではなくて伝記である。著名な事績の中には徳や不徳は現われず、ちょっとした行動、言葉、戯れの方が、しばしば何千と死体をつくる戦争や大規模な布陣や町の攻囲よりも性格を明らかにする。……大事業や闘争のことは他の人に任せて、私は心の特徴に立ち入り、それによって各人の生活を現わそうと思う。(2)」

しかし、人々の徳、不徳、性格、行動、言葉、生活を記し、更には、それらを対比したりして、筆者は一体何をしようとするのか。プルタルコスは、これに関して、列伝中のある箇所で次の様にいう。「私は、他の人々の為に数々の伝記を書くことになったのに、今では歴史(ママ、伝記?)を鏡の様に使って、そこに書いた人々の徳性を手本とし、自分の生活をそれに近づけ飾ろうと努めている(3)」と。

明らかな様に、プルタルコスの目的は、主人公達の徳や不徳、それを現わした行為、生活を明らかにし、それを自分及び他の人々の徳の手本、処世上の教訓とも手本ともし、自分の性格の完成に資するにある。伝記を書くのはその為の手段である。(4) デメトリオスやアントニオスの様な悪徳の人々の伝記をも書く

のは、これを自分及び人々のみせしめにする為であろう。

(b) 教育(化)に資する為に書かれた伝記がある。西欧の中世に行われたいわゆる『聖者伝(Acta Sanctorum)』がそれの典型である。

例えば、エウギッピウスの『聖セヴェリヌス伝(Eugippi, Vita Sankti Severini)』。この伝は、セヴェリヌスの弟子エウギッピウスによって、512年ナポリで書かれた。10世紀以来、バイエルン=オーストリア地方で流布されたという。

また、チュラノのトマス(Thomas von Celano)の『聖フランシス伝(第一伝記、Legenda prima, 1229, 第二伝記、Legenda secunda, 1244)』、フランシス教団に属するスコラ哲学者ボナベントウラ(Bonaventura)の『聖フランシス伝(Legenda major, 1262)』等が有名である。チュラノのトマスは、1215年頃からフランシス教団に加わったフランシスの弟子で、法王グレゴリ九世の委嘱によって1229年アッシジでこの伝を書いたという。[5] また、ずっと古いのでは、350—360年頃、アタナシウスによって書かれた『聖アントニウス伝』がある。

これらの『聖者伝』は、聖者の事績を語ることによって、修道者に模範を示し、また、彼等を鼓舞することを目的として書かれた。[6][7] この様な目的の為、『聖者伝』は、聖者そのひとの個性や生涯をあまり記さず、主として、聖者の事績(聖者が行った奇蹟)を記す。(尤も、トマスの『聖フランシス伝<第一伝記>は、フランシスの個性や言葉や生涯をも記し、また、徳を記しても類型的でなく、奇蹟を記しても非現実的な奇蹟は稀で、それだけ近代の伝記に近づく傾向を示している、といわれる。[8])

(c) この様に広く一般の人々の、またある集団の為ではなくて、特定の一家一族の為に、彼等の道徳上、処世上の教訓にする為に、また、彼等の子弟、子孫を鼓舞し、その教育に資する為に書かれた伝記がある。古いものでは、イソクラテス(Isocrates, B.C. 436–338)が紀元前370年頃書いた『エウアゴラス(Evagoras)』伝がそれである。(エウアゴラスは、サラミス島キュプロス国の王<僭主>で、息子ニコクレース<Nicocles>が父の跡をついだ。『エウアゴラス』伝は、いわゆる「キュプロスの演説<Cyprian orations>」の一つ

で、ニコクレースによって催された父王エウアゴラスの記念の祭礼の為に草された、という。[9])

さて、イソクラテスは、この伝記で、一通りエウアゴラスの諸徳を述べた後に、次の様にいう。「私がもうこれ以上何もいわずに話をここで打ち切っても、既に述べたことでエウアゴラスの偉大さと剛勇とは明白であろう。にも拘らず、右の二つのことは、これから話すことによって更に明白になる。[10]」この文章の意味は、次の様に解される。もし、この伝が、ただエウアゴラスの徳を讃える為のもの(いわゆる「頌徳文」)なら、私の叙述は、もうここで打ち切ってもよい。しかし、これは単なる頌徳文ではないので(他にもう一つ目的があるので)、エウアゴラスの徳や偉大さを更に明白に述べねばならぬ、と。では、その「もう一つの目的」は何か—。

それについて、イソクラテスはこの伝中で次の様に述べる。「私がこの文(discourse)を書くことを企てたのは、次の様に信ずるからである。もし、誰かがエウアゴラスの事績を集め、これに言葉の飾りをつけて、それをあなた(ニコクレース)に委ねて、あなたがその事績を熟考し、それに学ぶ様にするなら、そのことは、あなたの為に、あなたの子供達の為に、またエウアゴラスのすべての子孫の為に、この上ない最良の刺激になるであろう」と。[11])

(d) 伝記の利用といえば、普通はこの様に、道徳上、処世上の教訓や模範として、また、刺激(鼓舞)の手段として、また教育(化)の手段としての利用である。しかし伝記は、この他にも様々の目的に利用される。

例えば、ブルクハルトによると、14世紀のイタリアでは、個人や都市の名声が重視され、人々は名声にあこがれた。[12]そこで当時イタリアでは、例えば、特定の都市の名声をあげる為に、それを目的に、その都市に住む(または、住んでいた)名声ある人々(名士)の伝記が書かれた。14世紀末に、フィリッポ・ヴィラーニによって書かれた『フィレンツェ名士列伝』はその一例である。[13])

(e) 伝記が政治の道具として、政治上のかけ引きの為に、又、自分に有利な与論をおこす為に書かれることがある。16世紀末に、ヨーロッパ各国であいついで現われた、別々の筆者による、内容の著しく異なる様々の『ドン・カルロス伝』はその一例である。(後述参照)(ドン・カルロス<Don Carlos, 1545–68>

はスペイン王フェリペ二世<Felipe II, 1527-98>の子で、1568年7月、父王によって監禁されたまま24歳で死んだ。彼は性格的に父とあわず、信仰や政治上の見解でも父王と対立した。)

これら様々のカルロス伝は、みな公正な立場で書かれた伝記ではなくて、各国が、国王とドン・カルロスとの対立に着眼して、カルロスの死を政治的に利用する為に、都合のよい資料のみを取り上げ、都合のわるい資料は伏せて公刊したものである。(第六章参照)

2

「利用された伝記」の実例をあげたが、次にこの実例について、果してそこに、「主人公に対する伝記者独得(固有)の関心」といえる様な関心がみられるか否かを検討、確認しなければならぬ。便宜上、先にあげたイソクラテスの『エウアゴラス』伝について検討する。

「検討」の前に、先ず、筆者イソクラテスがこの伝記を書く原動力となったとみえるものを分析して、そこにおける筆者の関心(なかんずく、主人公に対する関心)の実情が如何なるものかを確かめねばならぬ。

イソクラテスにとって、「伝記を書く」のは、これを新王一族の教育、教訓に資する為で(前述)、「伝記を書くこと」自体が目的ではない。目的は「伝を書くこと」の外にある。当然の結果として、教育、教訓に必要な主人公の徳や事績に対する筆者の関心が優先し、伝を書くこと自体にとって大切な主人公その人に対する関心はそれに従属する。主人公その人に対する関心がない訳ではないが、それは後景へ退く。結果として、その「関心」は弱まる。しかも、これは「利用された伝記」という形式上そうなるはずだというのでなく、実際に、そうなのである。『エウアゴラス』伝の叙述の特徴がその実際の「弱まり」を証している。次にその「証」をみよう。

『エウアゴラス』伝の内容をみると、エウアゴラスの生れ、彼が競技に優れていたこと、彼の亡命、帰国と王位収奪のことが先ず記され、ついで、その際に示した彼の勇気、正義、潔白、政治上軍事上の見識と実力等王者の模範としての彼の諸徳が述べ(讃え)られ、最後に、前述したこの伝を書く筆者の目的が記されている。これらの内容は、大体年代順に組みたてられているが、右述

した「弱まり」に関連して注意すべきは、『エウアゴラス』伝の右の様な叙述に対するギリシアの伝記の研究者モミリアーノの次の様な証言(批判)である。「イソクラテスは、エウアゴラスの性格(徳)のむしろ平板な叙述と、他の人々がエウアゴラスについてなした年代学的記述とをむだに結合している。」(14) 傍点の部分は、『エウアゴラス』伝に対する非難ととれるが、では、どうして非難された様なことがおきたのであろうか―。

原因として先ず考えられるのは、筆者が主人公をよく知らなかったことである。イソクラテスがエウアゴラスを直接知っていたか否かは明らかでないが、ある古典の専門家は、イソクラテスが晩年のエウアゴラスの人柄や事績について、詳しい知識をもっていた様だ、という。(15)

では、よく知っていて、どうして非難される様なことがおきたのか―。結局、主人公そのひとに対する関心が弱かったからだ、と考える他はない。主人公そのひとへの関心が筆者のうちに生きており、それが他に優先する強い関心であったら、その主人公の性格の叙述が「平板な」、血の通わぬものになるはずがない。また、それとエウアゴラスの事績の年代学的記述との結合がうまくゆかない(「無駄に結合する」)という様なこともおきるはずがない。否、そもそも、エウアゴラスの生涯の事績を記すのに、「他の人が、エウアゴラスについてなした年代学的記述」を借用することでお茶をにごす様なことはしないはずである。イソクラテスにとっては、事績、諸徳それ自体が大切で、エウアゴラスそのひとは二の次なのである。結局、モミリアーノが批判した『エウアゴラス』伝の叙述の弱点は、みな、エウアゴラスそのひとに対する筆者の関心が弱かった為に生じた、と解する他はない。

結局、『エウアゴラス』伝における筆者の関心の実情は、この伝記を書く原動力となったとみえるものを中心に叙述を分析した限りでは、新王(ニコクレース)一族の教育、教訓に資するという筆者の目的の為に、主人公の徳や事績(事業と功績)への関心が優先し、主人公そのひとに対する関心はそれに従属する(その為に弱められる)という構造をもつ。

先に実例としてあげたこの種類の他の伝記も、「原動力」となったとみえるものを中心に叙述を分析した限りでは、「主人公に対する筆者の関心」に関し

て、何れもほぼ同様の実情、構造を示している。

3

さて、われわれの問題は、先ず、伝記の主人公に対する右述の様な関心が、果して「伝記者独得(固有)の関心」といえるか否か、である。

さて、この伝の筆者の主たる目的は、右の分析の結果では、ただ外見だけでなく、実際に人々(ニコクレース一族)に道徳上、処世上の教訓を示すことである。筆者にこの伝を書かせた原動力の核心をなすのはこの目的であり、この目的を達成したいとの願いである。「伝記を書くこと」それ自体を主たる目的としているのでも、また、そのことを主として願っているのでもない。してみると、この伝を書いている限りは、筆者は伝記者である前に、また伝記者である以上にニコクレース一族の教訓(育)者である。それ故、筆者の、主人公に対する前述の様な関心は、教訓(育)者の関心であって、これを伝記者の、いわんや「伝記者独得の関心」ということはできない。

然し、われわれの「検討」「確認」の仕事は、まだ、これだけでは不十分である。

果して、「利用された伝記」における筆者のこころは、a. 右に分析した所ばかりでなく、こころの何処にも、右に明らかにした底の関心以外の関心は含んでいないのであろうか—。われわれの右述の様な分析の及ばない筆者のこころの何処かに、ひそかに「目的」に従属しない関心(主人公に対する関心)が含まれていないであろうか—。b. また、この伝記(『エウアゴラス』)以外の伝記においても「目的」と「主人公に対する関心」との関係は、常にこの伝記におけると同様であろうか。これが、なお検討、確認されねばならぬ。

さて、右の二点(a、b)に関して、「利用された伝記」一般の次の様な特性が注意されねばならぬ。

一般に(この伝記ばかりでなく)始めから手段として利用する為に書かれた伝記では、筆者の立場は判然としていて、伝記を書く「目的」が常に、判然と強く筆者の心を支配し、いわば、それが彼の心を独占しているから、「目的」に従属し切らない底の関心(主人公に対する関心)が筆者の心の何処かに残留

することはまずない。況して、その様な関心が伝記を書く原動力のなかへ混入し、「目的」と並んだ主たる要素となることはない。

してみると、この伝記ばかりでなく、「利用された伝記」においては一般に次の様にいってよい。前述の様な分析が及ぶところは勿論、それが及ばない筆者の心の何処にも、「目的」に従属し切らない底の関心（主人公に対する関心）が潜んでいることはない、と。

以上、検討の結果、次の様にいうことができる。

一般に、「利用された伝記」の筆者の場合、彼の「主人公に対する関心」の実情は、常に筆者が伝記を書く「目的」に従属する底のものであって、それに従属し切らない「関心」が彼の心中の何処かに潜んでいたり、いわんや、それが「原動力」の内へ、主たる要素の一つとして混入することはあり得ない、ところが、「目的に従属する関心」は先に検討した様に「伝記者独得の関心」とはいえない、それ故、一般に、「利用された伝記」の筆者のこころの内には、「主人公に対する伝記者独得の関心」といえる様な関心は存在しない、と。

四

1

「好事家的伝記」とでも呼ぶべき種類の伝記がある。例えば、石川淳、『諸国畸人伝』がそれである。(1)(2)

これは、多くの人々の伝記を書き並べたいわゆる列伝であるが、ここに筆者がとりあげるのは、出雲の指物師、豊後の歌舞伎役者、駿河の左官、常陸の遊芸人、出羽の医者、信濃の俳人、越後の商人、阿波の人形師、安房の石工、越後の政治家の10人で、彼等の住所も職業もまちまちである。また、彼等はその地方でこそ名のある人々だが、それぞれの道でとり立てていう程の人物ではない。ただ、彼等に共通していえることは、彼等がみな並外れてあく（個性）の強い奇行のもち主であることである。そして、彼等が共通してしかも、取り立てていうほどに並外れているのはその点だけである。

してみると、筆者がこれらの人々を、この列伝でまとめて一緒にとりあげたのは、ただその点に着目し、ただその点に引きつけられてのことに違いない。

この伝が「畸人伝」と名づけられたのはその所為であろう。

結局、この場合、筆者は、あくの強い風変りな人々、奇行の人々をただそれだけの理由で取り上げ、彼等の伝記を書いているのである。[3]

では、筆者にこの様な伝記を書かせた原動力は何か―。

右の様な畸人達の伝記が何かの役にたつとは思えないから、この場合、筆者はそれを書いてどうしよう（何かの目的の為にする）というのではない。また、主人公達は「風変りな」というだけで、それぞれの道でとり立てていう程の人物ではないし、彼等の人物、存在、行跡、事績が特別な文学的、歴史的意義をもっているわけではないから、筆者は文学的、歴史（学）的狙いで彼等の伝記を書いているのでもなかろう。結局、筆者にとって、彼等の伝記を書くのは一種の遊びにすぎない。一種のものずき、ある場合にはむしろ下手物趣味というべきか―。『諸国畸人伝』の解説者中村幸彦氏も、ここに取り上げられた畸人達は「それぞれの芸に遊んで、普通の眼からみれば、二流三流、ややげてもの臭いものも混ずるが、共通して個性の強い、あくの持主である。」という。[4]

結局、この伝記の筆者には、「利用された伝記」の場合の様なはっきりした目的があるわけでも、特別な狙いがあるわけでもないが、それらに替って、ここには筆者の「物ずき」「下手物趣味」がある。それが筆者にこの伝を書かせた原動力である。[5] この種の伝記を、「好事家的伝記」と呼ぶ所以である。

2

「畸人伝」の実例をあげたが、筆者に「畸人伝」を書かせた原動力とみえるのは、前述の様に、筆者の「物ずき」、「好み」である。この様な原動力は、その性格上「利用された伝記」の原動力とも、後述する他種の伝記の原動力とも類を異にする。それ故、これらの伝記は、われわれの分類では、独立した一つの類を形成する。

そこで、次に、この類の伝記について改めて、果してそこに、「主人公に対する伝記者独得の関心」といえる様な関心がみられるか否かを検討し確認せねばならぬ。（便宜上、実例としてあげた伝記を手掛りにする。）

先ず、右の伝記における筆者の関心の実情をみよう。

前述の様に、この伝記を書く原動力となったのは、筆者の「物好き」「好み」

である。そこで、筆者の関心は、何よりも先ず、また主として「好き」「好み」の対象たる主人公の奇行、逸事、風変りな作品、作風等に向けられ、主人公そのひとに対する関心はそれに従属し、後景へ退く。結果として、その「関心」は弱められる。

実際に、筆者はこの伝で、主人公の奇行、風変りな作品、作風ばかりを強調し、各人の伝記を大抵は、それらに関する記述でしめくくっていて、主人公そのひとには殆ど触れない。[(6)](後述参照) たまさか、主人公の生活に眼を向けることがあっても、筆者はどこかで主人公と風狂の袖をすりあわせたのか、ただ彼等の風狂のくらし向きの跡を追うばかりで、くらしの主そのひとに特別な関心をもっている風ではない。だから、主人公についての「感想」を求められても答え様がないのである。(前註(6)参照)

結局、この伝における筆者の関心の実情は、主人公達の奇行、逸事、風変りな作品、作風等への関心が主であって、主人公そのひとに対する関心はそれに従属するという構造をもつ。

さて、われわれの問題は主人公に対する筆者の右の様な関心が、「伝記者独得(固有)の関心」といえるか否かである。右述の様に、この類の伝記の筆者は、自分の「すき」「好み」に基づき、それを充たす願いを原動力として伝記を書く。伝記を書くこと自体を目的としているのでも、また、そのことを主として願っているのでもない。してみると、これらの伝記を書いている限り、筆者は伝記者である前に或いは以上に「好き者」(好事家)である。それゆえ、主人公に対する右述の様な筆者の関心は、好事家の関心であって、これを「伝記者の関心」と、少なくとも「伝記者独得(固有)の関心」ということはできない。

然し、この類の伝記における主人公に対する筆者の関心の実情は、右に分析した関心に尽きるのであろうか—。

この類の伝記の原動力は一応は筆者の「好き」「好み」だとしても、それが(利用された伝記の場合の様に)筆者のこころを独占し、支配し切っている様には思えない。例えば、『諸国畸人伝』の筆者は、主人公の奇行、風変りな作

品、作風を記すだけでなく、それとは別に、伝中、稀にではあるが、主人公達の「あく」の本質を追究して、これを例えば「えこじ」「気合」などと名づけて評価している場合がある。[7] これは、筆者が、主人公達の「あくの強い人間」に対して、物好きからでなく、直接人間として同感(興味)或いは親近感をもっていることの現われである。つまり、これは、筆者自身も意識しないままに、彼の「好み」等に従属し切らない底の主人公に対する関心(主人公そのひとに対する人間としての直接の関心)が彼の心中に残っていることの証である。(注意すべきは、この「関心」が、「目的」「好み」等を介しての関心でなくて、直接に主人公そのひとに対する関心であることである。)

然し、この種の関心は、「好み」に従属し切っていないとはいえ、先に見た筆者の関心の実情からいうと、いわばその陰にかくれている(筆者自身も十分意識しない)底の関心であって、それが「すき」「好み」等と並んで或いは、それに先立って、「伝記を書くこと」と直結している(原動力となっている)訳ではないから、なお、好事家的伝記に含まれた好事家的関心であって、これを主人公に対する「伝記者独得(固有)の関心」などということはできない。[8] (後述七章参照)

結局、「好事家的伝記」の場合、主人公に対する筆者の関心のなかには、「すき」「好み」を介しての関心の他に、その陰にかくれて、主人公そのひとに対する直接の関心(興味、同感、親近感)が含まれていることがあるが、これを「主人公に対する伝記者独得(固有)の関心」ということはできない。[9]

以上、検討の結果次の様にいうことができる。

「好事家的伝記」の筆者のこころの中には、「主人公に対する伝記者独得の関心」といえる様な関心は存在しない、と。

五

1

特定の目的の手段として利用する為でも、また、筆者の特殊な「すき」「好み」を満足させる為でもなくて、文学的狙いで書かれた伝記がある。以下これ

を「文学的伝記」と呼ぶ。

さて、この種の伝記は数が多く、また、世に広く行われているので、今日では、伝記といえば、普通、文学の一ジャンルと思われているほどである。(「文学的狙い」で文学作品として書かれた伝記は、「伝記文学」と総称されるのが普通であるが、ここに殊更に「文学的伝記」と呼ぶのは、「伝記文学」のうちで特に「文学的狙い」による伝記の性格を純粋に且つ際立って示している今世紀の作家達の手になる伝記である。[1] 註<16>参照)

さて、「文学的伝記」について、そこに「主人公に対する伝記者独得の関心」といえる様な関心が存在するか否かを検討するまえに、例によって、先ず、「文学的伝記」における筆者の関心の実情をみよう。しかし、それをみるには、「文学的伝記」の具体的な姿を示さねばならぬ。次に、一つの実例によって、筆者の「文学的狙い」の現われを中心にその具体的な姿を示そう。

実例として、シュテファン・ツヴァイク (S. Zweig, 1881–1942) の『マリー・アントワネット』を取り上げる。

a. ツヴァイクは、彼がこの伝を書いた動機に関して、次の様にいう。もし、苛酷な運命(フランス革命)が彼女をおそわなかったら、「ただ一人も彼女の人物を問題にし、その消え失せた魂を探そうという要求を感じなかったであろう」[2]と。更に、彼女をおそったその苛酷な運命と彼女の生涯について、「運命は、……弱い魂からも偉大な悲劇が生じうることを証明する為に、時々、取るに足らぬ主人公をみずから求めることがある。マリー・アントワネットは、その様な悲劇の一つであり、その様な心ならざる英雄ぶりを演出する最も素晴らしい悲劇の一つである。[3]」

明らかな様に、ツヴァイクがマリー・アントワネットの伝記を書こうと思いたったのは、彼女をおそった苛酷な運命の所為である。「運命」に弄ばれて、彼女が心ならずも演ずる英雄ぶりの所為である。否、それが「最も素晴らしい悲劇」であるからである。

この際、筆者は文学的視点から主人公の生涯を舞台で演じられる劇を見る様な態度でみている。彼が主人公の生涯を「最も素晴らしい悲劇」になぞらえ、主人公を心ならずもそれを演ずる俳優になぞらえたのはその所為である。

結局、ツヴァイクがこの伝を書いた動機は、主人公及び彼女の生涯に対する（それを「素晴らしい悲劇」とその主役になぞらえる底の）彼の文学的関心である。

b．ツヴァイクは、この伝記に、「一平凡人の面影」という副題をつけている。彼によれば、マリー・アントワネットの生涯は、「一人の中庸の人物を運命が……有無をいわさぬその鉄拳によって、彼女本来の凡庸さから強引に抜け出さしめ得るということの……顕著な実例」なのである。(4)

マリー・アントワネットは、無情な「運命」の鞭に打たれ、それに抗い、呻き、逃げまわる。しかも「運命」は、悲劇的な彼女のその苦悩を通じて、終に「彼女の魂のうちに、両親や祖先から引きつがれたまま埋もれていた偉大さの一切を彫塑的に刻み出す」(5)。そればかりではない。彼女は、自分でも、自分のうちに偉大なものが始まりつつあることを予感する様になる。自分が受けた苦悩によって、自らの些細な平凡な人生も実例として後世に生きるところがあろうことを予感する(6)。「この様な一段と高い責務の自覚によって、彼女の性格は己れ自身を超えて成長する。はかない形が崩壊する直前に、芸術品、永続的な芸術品が実現する。最後の最後の瞬間に、平凡人マリー・アントワネットは終に悲劇の域に至り、その運命と同様に偉大となるからである」(7)。

結局、ツヴァイクにとって、生涯の苦しみを通じて、最後に自己の魂のうちに祖先（ハプスブルグ家）から受けつがれた「偉大」を彫塑的に実現し、最後に一段と高い使命の自覚によって自己自身を超えて偉大となるマリー・アントワネットは、一個の芸術品である。そして、彼女の苦悩の生涯は、「運命」が、「平凡人」からその「芸術品」を創りあげる過程である。ツヴァイクは、マリー・アントワネットその人を、また、彼女の苦悩の生涯をその様に解釈する。

c．ツヴァイクによれば、平凡中庸の女性であったマリー・アントワネットは、「本来の尺度以上に偉大たるべく内からでなく外から強制せられる」(8)為に、自らの責めもなく様々に苦悩しなければならなかった。しかも、彼女は、「その苦悩をただ独り耐え忍ばなければ」(9)ならなかった。彼女は、「芸術家の様に、その苦しみを作品に、不滅の形態にかえる聖なる救いを持たないからである」(10)。

ツヴァイクのこれらの言葉は（これを表返せば）、この伝記を書いた際の彼

の次の様な願いの表明と受け取れる。主人公マリー・アントワネットの生涯に亙る苦しみを、彼女に代って芸術作品に、不滅の形態(文学作品としての伝記)にかえ、せめて彼女の魂に聖なる救いを齎したい、と。ツヴァイクがこの伝記を書いた際、常にもちつづけたのは、この願いであったに違いない。

ツヴァイクによれば、マリー・アントワネットと彼女の生涯に対しては、対立する政治的立場から相反する評価がなされ、彼女の死後、それぞれの線に沿った文献が数多く現われる。また、1815年頃からは、人々の好奇心に応じて、いわゆる「回想録」が流行し、彼女のものという行跡や逸話が述べられる。また、「彼女の性格を理想化し、感傷化し、英雄化する」試みがなされる。[11] ツヴァイクは、これらの試みは、みなマリー・アントワネットの「魂の真実」を明らかにするものではない、と批判する。[12] そして、彼女の伝記を書く彼自身の願いは、彼女を神に祭りあげることなく、また、理想化し英雄化することなく、ただの人間として扱い、人間マリー・アントワネットの「魂の真実」を解明すること、人間(しかも平凡人)としての彼女の苦悩、それを通じて彼女が最後に自己自身を超えたあの苦悩を「何ら誇張的潤色を加えないで」示すことだ、と語るからである。[13]

ツヴァイクの右述の様な「動機」(主人公の生涯を「素晴らしい悲劇」になぞらえる文学的関心)、「解釈」(主人公の人及び生涯を、一個の芸術品とそれの創造過程とする文学的芸術的解釈)、最後に、主人公の苦悩の生涯を芸術作品(文学的伝記)にかえて、主人公の魂に聖なる救いを齎したいという「願い」、これらの中心にあって、これらの源泉となったもの、それがこの伝記を書いたツヴァイクの文学的狙いである。逆にいえば、右の「動機」等々は、この伝記を書く際の筆者ツヴァイクの「文学的狙い」の諸相である。そして、それら諸相がこの伝記のいわば骨格を形成している。

右の様に筆者がこの伝記を書く「動機」「解釈」「願い」を含み、それらの源泉となったツヴァイクの「文学的狙い」が、少なくとも形式上は、彼にこの伝を書かせた原動力であることはいうまでもない。

2

文学的伝記の具体的な姿(その骨格)を、一つの実例によって示したが、次に、この実例について、筆者ツヴァイクは、この伝記を書く際に主人公マリー・アントワネットに対して如何なる関心を抱いていたか、その実情を(形式にこだわらず、立ち入って)確かめ、また、その関心について、果してそれが伝記者独得の関心といえるか否かを検討、確認しなければならぬ。

さて、先ずその「実情」であるが、右にその具体的な姿をみてきた限りでは、『マリー・アントワネット』の筆者ツヴァイクの主人公に対する関心は、彼の「文学的狙い」の下にあり、それに従属している。これを具体的にいうと、

a. 筆者にとって、マリー・アントワネットは、筆者が文学的関心をよせる「素晴らしい悲劇」の主人公であり、「文学的に解釈された生涯」の主であり、「運命が創りあげた一箇の芸術品そのもの」「筆者が願った文学作品の主人公」等々である。結局、マリー・アントワネットに対する筆者の関心は、ここでは、彼女そのひとに直接向けられた関心ではなくて、筆者の文学的関心、文学的解釈、文学的願いを介しての間接の、二次的関心である。

b. この場合、筆者は彼の全人をあげて主人公に直接し、主人公そのひとを共感している(傾倒している)のでなくて、主人公から身をひいて、特定の視点(文学的視点)から、且つ心理分析という手段を用いて(ツヴァイクは、彼の文学的解釈に心理分析という手段を用いる[14])主人公をみている。主人公に対する関心は弱まり且つ一面的になり類型化せざるをえない。

主人公マリー・アントワネットに関する筆者の叙述が、一内容的には、主人公の苦悩や孤独に対する同情、彼女の人間に対する感銘を示しているに拘らず一、主人公そのひとを読者に共感せしめる底の切実さや迫力に欠け、何か空空しい感を与えるのは、そうした主人公そのひとに対する関心の弱まり、一面化、類型化の所為で、それらのことを証するものである。(後述第3節参照)

(右述した二点<a、b>は、程度の差はあれ、「文学的狙い」で書かれた他の文学的伝記においても同様である。)

さて、『マリー・アントワネット』における、主人公に対する筆者ツヴァイ

クの右の様な関心が伝記者独得の関心といえるであろうか—。

右にこの伝の具体的な姿をみてきた限りでは、ツヴァイクはただ文学的狙いで(それを原動力として)、この伝記を書いている。彼は、伝記を書くことそれ自体を第一に狙っていたわけではない。彼にとって、伝記は主人公の伝記である以上に、彼の文学的願いによって生れた彼の作品である。それ故、この伝記を書いている限りは、彼は何よりも先ず文学者である。少なくとも、伝記者である以上に文学者である。してみると、右述の様なツヴァイクの主人公に対する関心は、文学者の関心であって、これを伝記者独得の関心ということはできない。

3

然し、われわれが右にみた「主人公に対する筆者の関心」の実情は、『マリー・アントワネット』の中、特に筆者の「文学的狙い」の諸相が顕著に現われた叙述に即してみたものである。(1節参照)つまり、「文学的伝記」の原動力となったものがみえる、然もそれが顕著にみえる限りの叙述(それの骨格)を分析したものである。分析の結果が前述の様になるのは当然である。またそこで、「関心」の実情といっても、右にみたのは、外から窺い知ることができる限りでの筆者の心情(「関心」)の実情に止まる。そこで問題は、「マリー・アントワネット』における主人公に対する筆者の関心の実情が、右述の様な関心に尽きるか否か、また、他の文学的伝記でも「実情」は常に右と同じか否かである。

外から窺い知ることのできない、また、われわれの分析の及ばない筆者の心の何処かに、ひそかに、「文学的狙い」に従属しない底の関心(主人公そのひとに対する直接の関心)が潜んでいるやも知れないではないか—。そして、それが筆者がこの伝記を書く「原動力」の中に筆者が気がつかぬまま、文学的狙いと並んで混在しているかも知れないではないか—。(「主人公そのひとに対する直接の関心」が、かく原動力の中へ混入すれば、それは「伝記者独得の関心」ということができる<後述>。また、その際、この伝記自体は、もはや単純な文学的伝記ではない。形式上名目上はともかく、それの正体<実体>は、文学的狙いと「伝記者独得の関心」とが原動力の中に併存した、その限りでは本来の伝記にちかい伝記といえよう。<一章3節参照>)

さて、右の二点に関して、われわれは先に二つの場合をみている。一つは「利用された伝記」の場合で、形の上で原動力となった筆者の「目的」が筆者に強く意識され、それが実質的にも筆者の心を独占し切っていて、主人公に対する他種の関心がそこに潜んでいたり、いわんや「原動力」のなかへ混入したりする余地のない場合。もう一つは「好事家的伝記」の場合で、筆者の「好き」「好み」が一応は原動力となっているが、それが筆者の心を支配し切っている訳でなく、主人公の人間に対する直接の関心が、ひそかに、一筆者が十分意識しないままに一、筆者の心中に潜んでいる(尤も、それが原動力の中へ混入するまでには至らない)場合である。『マリー・アントワネット』の様な文学的伝記の場合は、その何れであろうか。或いは、それらとは別の状態であるか。

a. さて、注意すべきは、『マリー・アントワネット』の場合、先に分析した様に、それの筆者の「文学的狙い」の中には、伝記を文学作品として書くという願いが含まれていることである。この「願い」は、この伝記と限らず、一般に「文学的伝記」の筆者にとっては決定的な(不可欠の、且つ他に優先する)関心である。それは一般に「文学的狙い」の核心をなし且つ他の凡ての関心に優先する願いである。

b. そこで、一般に「文学的伝記」の場合、仮に、筆者が直接主人公に如何に深く同情し、主人公そのひとに同感し感銘し、殆んど傾倒にちかいこころをもったとしても、この伝記が「文学的狙い」で書かれる限りは、その様な筆者のこころが、そのまま(生のまま)独立して、文学的狙いと並んで、彼が伝記を書く原動力の中へ入り込むことはあり得ない。(原動力の内へ入り込めば、「傾倒」は主人公そのひとに対する直接の関心であるから、これを伝記者独得の関心といってよい。然し、そういうことはあり得ない。)というのは、伝記を作品として書く為には、筆者は作者として主人公そのひとから身を引いて(直接することを止め)、改めて特定の視点から主人公を見なければならず、しかも「文学的狙い」の場合には、一般に前述の様に、伝記を作品として書くという願いが、従って右の態度が凡てに優先するからである。

ツヴァイクの『マリー・アントワネット』においても、筆者は、主人公に対

して、殆んど傾倒にちかい心情をもっている。伝中、筆者は、無情な「運命」に弄ばれるマリー・アントワネットの苦悩と、最後に臨んでの彼女の孤独に深い同情を寄せ、また、それらを通じて成長し完成してゆく彼女の人間の「偉大」に深く感銘している。それは、単なる文学的関心を超えた、それを介さない人間ツヴァイク(作者ツヴァイクではない)の人間マリー・アントワネットに対する直接の同感であり感銘である。(15)

筆者がこの様に人間として、人間マリー・アントワネットに直接強い関心を抱いていたことは、伝の内容からばかりでなく、また、彼がこの伝記に「一平凡人の面影」という副題をつけたことからも、更には、ツヴァイクがマリー・アントワネットを神に祭りあげたり理想化したりすることに反対して、この伝記では、人間マリー・アントワネットの魂の真実を、誇張潤色を加えることなく示すことを強調している(前述)ことからも察せられよう。

然し、ツヴァイクは、この『マリー・アントワネット』では、一人の人間として、主人公の人間に直接するその様な態度、心情を生のままもち続けることができない。主人公の伝記を作品として書くという願いの為に、彼は作者として主人公から身を引いて彼女を見てしまうからである。

「傾倒」に基づいて自己目的的に伝記を書く場合には、筆者は、見て記しているのではない。彼にとって、主人公の生涯を記すことは、実は、その半面で主人公と共に彼の生き方を生涯に亙って辿ることである。そして、それによって、その「生き方」を生きる主人公そのひとに直接する(そのひとに出逢う)ことなのである(後述参照)。より的確にいうと、筆者は主人公の生涯を全人で辿ることによって、主人公そのひととの出逢いを確認(追体験)しているのである。彼は、主人公そのひととの出逢い(傾倒)を原動力として、ただその「出逢い」を全人で確認(追体験)する為に伝記を書くのである。(後述参照)

ところが、伝記を作品として書くツヴァイクは、作者として恰も画家が肖像画を描く様に、主人公から離れて主人公を見て、彼の生涯を記す。然も、ツヴァイクの場合、「作品として書く」という願いが凡てに優先する為に、ツヴァイクが一人の人間としてもった主人公に対するかの「同感」も「感銘」も結局は、主人公に直接する、その直接性を喪って色褪せざるを得ない。実際に、『マリ

ー・アントワネット』の中にみられる、主人公に対する筆者の「同感」「感銘」は、もはや「自己目的的伝記」にみられるそれらの様な読者の心に迫る切実さも迫力ももたない。(一般に、作品として書かれた伝記が、読者に主人公そのひとを共感させずにはおかぬ底の迫力に欠けるのはその為である。)

結局、ツヴァイクの『マリー・アントワネット』ばかりでなく、一般に「文学的狙い」による伝記においては、伝記を文学作品として書くという筆者の願いが優先し、筆者に強く意識される為に、主人公そのひとに対する直接の関心が、文学的狙いと並んで、いわんやそれに先立って、筆者が伝記を書く原動力のなかへ進入することはできない。その点、先述した「利用された伝記」の場合と同様である。

以上、われわれの検討によると、一般に「文学的狙い」による「文学的伝記」のうちには、形の上だけでなく実質的にも、主人公に対する伝記者独得の関心といえる様な関心は存在しない。(16)

——未完——

註

二

(1) 第一章3節参照。

(2) 第一章3節参照。

(3) 伝記の完全な分類は困難である。

古来今日まで多種多様な伝記が書かれたが、各種の伝記の性格の違いは微妙で、截然と区別できない場合が多い。それに、一つの伝記が種々の性格を併せもつ場合が多い。

ともあれ、伝記の分類は規準のたて方によっていろいろになされ得る。ここでは、われわれの当面の課題に鑑みて、一つの試みとして、形式上、外見上、筆者がその伝記を書く原動力となったとみえるものに着目し、そのものの大体の性格の違いによって分類した。(第六章註<45>参照)

三

(1) この様な「列伝」形式は珍しいことではない。例えば、司馬遷の『史記』の「列伝七十篇」でも、同じ一巻に二人又は三人(時には五人)の伝記を列記す

る。もっとも、ここでは、列記した伝記を改めて対比はしていない。

(2) プルタルコス、『英雄伝』(河野与一訳)「アレクサンドロス篇」1節、岩波文庫、第9冊、7頁。

(3) 同上、「アエミリゥス・パウルス篇」、岩波文庫、第4冊、49頁。

(4) もっとも、プルタルコスは『英雄伝』22巻全部をその様な目的で書いたかどうか一。ここに引用した文からも、最初はそうではなかったことがうかがえる。「友人の奨めで始めた」最初は、ただ主人公の個性を示す為に、或いはただ知識欲から書いていたのであろう。(同上、岩波文庫、第12冊、162頁参照)

(5) 下村寅太郎、『アッシシの聖フランシス』(南窓社)、第二章「伝記の問題」(Ⅲ、「フランシス問題」)参照。

(6) 同上、第二章「伝記の問題」(Ⅱ、「聖者伝 <レゲンダ> について」及びⅢ、「フランシス問題」)参照。

なお、下村博士は、一般に中世の『聖者伝』の性格について、次の様にいわれる。「中世の聖者伝は "Legenda" と呼ばれるが、これは伝説でも、また近代の意味の伝記でもない。『レゲンダ』は本来文字通り『朗読さるべき書物』であって、修道院や僧院で祈祷の際毎に朗読される聖者や殉教者の英雄的な事績であり、修道者の亀鑑を示し、鼓舞することを目的とする教化の書である。」(同上、21頁)

(7) 『アントニウス伝』の「序」には、「われらの父アントニウスの生涯と行跡……異国の修道士へおくらる」となっており、また、それにつづく文章から察すると、筆者(アタナシゥス)がこれを書いたのは、アントニウスの生涯が修道士たちにとって、禁欲生活の理想的模範となると考えられたからである。(今野国雄、『修道院』、岩波新書、4—5頁参照)

(8) 前出、『アッシシの聖フランシス』、第二章「伝記の問題」(Ⅱ、Ⅲ)

(9) Vgl. The Loeb Classical Library (以下 L.C.L. と略す)、ISOCRATES III, "Evagoras" p. 2.

(10) ibid. p. 21.

(11) ibid. p. 47.

(12) ブルクハルト、『イタリア・ルネサンスの文化』(Jacob Burckhardt, Die Kultur der Renaissance in Italien, ein Versuch. 1869.)(柴田治三郎訳)中公文庫、上、152—157頁。

(13) 同上、下、58頁。

(14) 秀村欣二、「古典古代の伝記の展開」(前出、『古典古代における伝承と伝記』所収)、19頁。(傍点筆者)

(15) 久保正彰、「ソクラテースからアゲーシラーオスまで」(前出、『古典古代における伝承と伝記』所収)、138頁。

四

(1) 「好事家的伝記」の実例として「畸人伝」をあげたが、他にも同類の伝記が存する。

ブルクハルトによると、ルネサンス期(14—16世紀)のイタリアでは、人々が「名声へのあこがれ」「名声欲」をもっていたが、他方、人々は名声を好み、名声のある人々のことを、ただそれだけの理由で知りたがった。これは名声欲とは異なった「好み」である。当時のイタリアの詩人達が書いた有名人の伝記の中には、筆者のこの名声への「好み」によるものも混じっていたのではないか—。(例えば、ボッカッチョによる『ダンテ』伝)

当時のイタリアでは、以前の様に王統や教会の序列に支配されず、ただ有名人であるというだけの理由で、その人の伝記を書くことが許されていた。(ブルクハルト、『イタリア・ルネサンスの文化』<柴田治三郎訳>、中公文庫、上、153—155頁、同、下、58頁)

(2) 各種の『畸人伝』が、寛政から幕末、明治初年にかけて流行した。その源流となったのは、寛政2年秋京都で出版された伴蒿蹊の『近世畸人伝』と『続近世畸人伝』(寛政10年刊)である。

『近世畸人伝』の刊行後、その一部を漢訳したもの(長野豊山、『三名士伝』、蒲生聚亭、『近世偉人伝』)が現われ、また畸人伝に倣った『近世畸遊伝』、『百家琦行伝』が刊行された。爾来今日まで、様々の類書が現われている。最近も陳舜臣、『中国畸人伝』(新潮社)が刊行された。

なお、一々対比して示すことはしないが、これらの畸人伝は、われわれの問題点に関しては、みな共通した特徴をもっていて同類である。

(3) 『近世畸人伝』は、歌人伴蒿蹊と画家三熊花顛の合作であるが、蒿蹊に依頼されて僧六如が、その序文を書いた。六如は、書名の「畸人」に関して序文中次の様にいう。「畸とは奇也、其の間儒にして奇なる者あり、禅にして奇なる者あり、武弁にして……要するに皆一奇の為に掩はれ、人復た本分の何人たることを知らず。故に概して畸人を以て之を目すと云ふ。熊生世純(三熊花顛)は好奇の士なり。」(原文は漢文)

してみると、筆者は主人公の本分の何たるかを知らず、ただ奇行、奇風の人をただその奇行奇風の故に畸人として取り上げたのである。

陳舜臣、『中国畸人伝』の場合も事情は同様である。筆者は、ここに取り上げた八人の畸人の生涯の抜き書きをあげているが、それら様々の生涯に対する自分の感慨を改まって述べることはしていない。そのこと自体、筆者が主人公達の本分を問題とせず、ただ彼等の奇行や変った生き方にひかれて、この列伝を書いたことを思わせる。

(4) 石川淳、『諸国畸人伝』中公文庫、201頁。(傍点筆者)

『諸国畸人伝』の解説者中村幸彦氏は、ここにあげた文章につづけて、「畸人

達は、…… 共通して個性の強い、「あく」の持主である。著者は、それを『本分』と見……るのであろうか—」という。果してそうか—。筆者は主人公達の「本分」を問題にし、それに関心しているのではない。ただ彼等の畸風、畸行、かわった生涯に関心するのみ。彼等の本分は知らず、故に彼等をただ畸人とし、畸人を好む故に彼等の生涯を取り上げたのである。

この点、先述した『近世畸人伝』の筆者の一人熊生世純と同類であろう。彼について僧六如は、「畸は奇也、……人復た本分の何人たるを知らず、故に概して畸人を以て之を目すと云ふ、熊生世純は好奇の士なり。」という。(註(3)参照)

(5) 註(1)参照。

(6) 例えば、信濃の俳人井月の項で、筆者は自分の関心が井月そのひとに対するものでなく、彼の風狂的なくらしむきに対するもので、もと好奇心から出た関心だという。「わたしは、この住む所もない俳諧師(井月)が終に落ち込んで行った土地を、終焉に至るまでざっと三十年の間、特殊な仕方を以て生活した現場を……自分の足で確かめたいという好奇心をもった。私が秋深い信濃の伊那谷を巡ったのは……どこかの道の辺で井月の幻と風狂の袖をすり合せたのかも知れなかった。」「伊那に滞在中ひとが井月についての感想を私に求めた。せっかくだが私は感想といふものとは縁の無いでくのぼうの生れつきである。私は秘かに駄句をつくって示した。

井月も のまずァ のまずョ 菊の酒」(『諸国畸人伝』、93—94頁、111頁)

(7) 例えば、出雲の指物師小林如泥について、筆者は次の様にいう。「この薄茶の席で、風雅なはなしの種はといえば、焼物の権兵衛、塗物の勝軍木庵(ぬるで)、わけても道具は如泥にかぎる。その如泥の細工の、茶箱なり香合なり煙草盆なりを、そこにもち出されて見ると、こいつ、今日の茶よりも庭よりも新鮮なことに、ひとは気がつくだろう。なにが不味ごのみか。この細工は不味流から自由である。なるほど如泥は依怙地であった。」(『諸国畸人伝』、9頁)

また豊後の歌舞伎役者算所の熊九郎について、筆者は次の様にいう。「あるとき、ある土地の興行に、どうしたわけか、熊九郎は始から終までついに一度も舞台に現われないことがあった。最後の幕がしまっても見物は動かない。熊九郎はどうした。熊九郎を出せ。口々に叫んで小屋がざわめいた折に、熊九郎はじめてある幕の破れ目からぬっと顔を突き出して、挨拶したという。……幕の破れ目からぬっと突き出した田舎役者のつらだましひは、三ケ津の名優にも劣らぬ気合である。」(『諸国畸人伝』、39頁)

筆者は、如泥について、また次の様にいう。「私はある香合を見た。桑田蝶文香合。……技巧を材料の中にしのばせて、鋭く円味あり、ケレンの無い作りぶりである。……蝶文またすこぶる古拙の味がある。これは尋常の彫師の手慣れた細工ではなくて、腕のきいた大工の親方が彫ったという気合が出ている。余事だが、もし許されるとしたらば、私が買いたいと思ったのはこれである。」(同前、

20頁)筆者が本当に「買いたい」と思ったのは、香合ではなくて大工の親方(如泥)の「気合」であろう。

(8) ここに一例をあげたが、好事家的伝記でも、殊に畸人伝の類いでは、畸人伝一般の特徴とまではいえないとしても、一般的に、一奇行、奇風と人とが切り離すのが難しいということもあってか一、奇行奇風に対する筆者の好事家的関心の隙間から、主人公の人間に対する筆者の人間としての同感や親近感が窺い知られる場合が多い。

(9) 先述(第二章参照)の様に、小論は一面では、「伝記の分類」の試みでもあるので、その視点から必要と思われることを次に附記する。

「何某の思い出」(例えば、「ソクラテスの思い出」「バッハの思い出」)と呼ばれるものがある。「思い出」の中には、主人公の生涯の行跡や事績を述べていて、かたちの上では伝記と呼ばれてよいものがある。もっとも、「思い出」では、普通筆者の主人公をなつかしむ心が中心となり、筆者はそこから出発して、主人公を偲ぶよすがを彼の行跡、事績のあれこれに求めるから、伝記といっても、内容は断片的で、片よったものになり易い。

さて、「思い出」を一種の伝記とみると、それは次の点で「好事家的伝記」に似ている。即ち「思い出」では、特殊な例外を除いて、筆者は、これを何かの為に利用しようと思ってはいない。また、これによって達成すべき狙いももたぬ。それに替わってここには、書くことによって充たされる心(主人公をなつかしむ心)がある。それを充たそうとする願いが、筆者に「思い出」を書かせた原動力である。

然し、次の点で「思い出」は「好事家的伝記」とは異なる。即ち、「思い出」では、筆者の「なつかしむ心」は、始めから特定の主人公と結びついて不可分である。「なつかしむ心」が先ずあって、それに基づいて主人公が選び出された訳ではない。(この点、「思い出」は、後述する「自己目的的伝記」と似ている。)また、「なつかしむ心」は、性格的に「すき心」よりは切実で、「すき」「好み」の様な余裕(遊び)がないのが普通である。

それでは、「思い出」の類を、伝記の分類においてどこに位置づける可きか一。一応は、それはここに述べた「好事家的伝記」と自己目的的に書かれた純粋な(本来の)伝記(後述)との間に位置するとしておいてよいのではないか一。

というのは、「思い出」は一方では「好き」「好み」による伝記と種々共通点をもつが(前述)、他方「思い出」の主人公を「なつかしむ心」は、感情的ではあるが、それは、直接、主人公に対する関心であって(その為に特定の主人公と結びついて不可分)、その点、純粋な伝記に類し、純粋な伝記にまで昇華する可能性を秘めているからである。実際に、「思い出」の中のあるものにあっては、主人公をなつかしむ心が昇華されて、主人公そのひとへの全人的な傾倒となり、「なつかしさ」が主人公そのひとへの全人をあげての共感に変貌している。これ

によって筆者は主人公をなつかしむ感情を超えて、主人公を全人的に捉え(逆に、主人公によって全人的に捉えられ)ることとなる。また、これによって、筆者が「思い出」で取り上げる主人公を偲ぶよすがは、断片的であっても、却って主人公そのひとを生き生きと再現し、これを読む人々に、主人公そのひとを全人的に共感せしめることとなる。「一ひらの貝殻で海水をとらえる」こともできるのである。(前出、拙稿「伝記者のこころ」、第四章3節及び第五章参照)

五

(1) この一群(いわゆる「文学的伝記」)の代表的な作者と作品をあげれば次の様になろうか—。(なお、後註(16)参照)

a. ストレチー (Lytton Strachey, 1880—1932)、『ヴィクトリア女王』『エリザベスとエセックス』。

b. ツヴァイク (Stefan Zweig, 1881—1942)、『ジョゼフ・フーシェ』『マリー・アントワネット』『バルザック』『エラスムス』。

c. モーロワ (André Maurois, 1885—1967)、『ディズレーリの生涯』『バイロン伝』。

(2) 『マリー・アントワネット』(高橋禎二、秋山英二訳)、岩波文庫、上、8—9頁。

(3) 同上、上、9頁。

(4) 同上、上、9頁。

(5) 同上、上、11頁。

(6) 同上、上、11頁。

(7) 同上、上、11頁。

(8) 同上、上、7頁。

(9) 同上、上、8頁。

(10) 同上、上、8頁。

(11) 同上、下、265—273頁。

(12) 同上、下、273頁。

(13) 同上、下、273頁。

(14) 同上、下、289頁。

なお、拙稿、「伝記論の試み(二)」(大阪府立大学紀要<人文・社会科学>、第25巻所収)、第三章第四節参照。

(15) ツヴァイクと限らず、近代の「文学的伝記」の作者は、主人公の人間に対して、人間として深い関心を示すのが常である。

例えば、ストレチー(前出)は、『エリザベスとエセックス』において、50歳をすぎて老境に入った女王の人間に関心し、彼女が嫉妬、逡巡、焦慮、かんしゃく、移り気等々女性らしい人間の真情をさらけ出す状況を殊更に詳しく記している。

（16）　いわゆる「伝記文学」の中には、この章で述べた、われわれのいわゆる「文学的伝記」の他に、様々の伝記が含まれる。

それらは、筆者の主たる狙いの性格から伝記文学と総称されているが、実際には種々の要素を含み、筆者の狙いも複雑である。例えば、伝記文学の傑作の一つといわれるボズウェルの『サミュエル・ジョンソン伝』(Boswell's Life of Johnson, Oxford University Press, 1904) の場合、筆者ボズウェルの狙いは、a．文学的狙い、b．主人公の記念碑を建立しようとの願い、c．主人公の独得の生き方を強調して、それを通じて主人公の人間を読者に共感せしめようとの狙いをもつ。（前出、拙稿「伝記について」㈠、四章三節参照）

伝記文学と総称される伝記はこの様に様々の狙い、目的、願いをもつのが普通で、われわれのいわゆる「文学的伝記」の様に、「文学的狙い」だけを際立ってはっきり示している例はむしろ少ない。（同上五章一節参照）（なお、森銑三、『伝記文学　初雁』、講談社学術文庫、「序に代へて」参照）